

■ベートーヴェン：交響曲第8番 ヘ長調 Op.93

1814年2月27日に初演されたベートーヴェンの交響曲第8番は、前年の第7番や《ウェリントンの勝利》に比べると、聴衆の評価が芳しくなかった。ウィーン的一般音楽新聞の批評では、拍手喝采を受けたが普遍的な喜びをもたらすには至らず、「要するに熱狂的興奮を生み出さなかった」と書かれている。実際、今日でもおそらく第7番の演奏回数は第8番より多く、人気も勝っていると言えよう。

しかし、ワーグナーが2つの交響曲をまとめて「牧歌的な音楽の理想郷を創造した」と評したように、第8番は第7番が表現している世界とそれほどちがいはない。細やかな転調が楽想を彩りながらも、澁刺とした明るさと軽やかさが曲全体を貫いている。楽想のあちらこちらに仕掛けられたユーモラスな動きは、ハイドンの交響曲書法を思い出させるにちがいない。田園風の朗らかで元気のよい楽想で始まってまもなく挟まれる休止符、短いフレーズの強弱の対比、オクターヴの執拗な反復、気の利いたシンコペーションなど、心躍る楽しさを演出する。

さらに、もう一つ重要なことは第8番が第7番と同じく、リズムをこれまで以上に活用していることである。数十分におよぶ全楽章をひとつの有機的な音楽にまとめる手法として、ベートーヴェンはモチーフの徹底的な労作を追求してきたが、ここでは歌曲で用いられるような抒情的なメロディをそのまま生かして、まとまりのあるオーケストラ曲を仕上げる方法が模索された。そこで統一的要素として用いられたのがリズムである。

スケルツォとメヌエットを挟んだ4楽章構成で、交響曲第7番と同じく、緩徐楽章を含まないのが特徴。第1楽章アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・プリオは序奏なしで快活に始まる。冒頭の簡潔な第1主題に対して、ファゴットを伴奏にヴァイオリンで呈示される第2主題は二長調から短調を経由して八長調へというユニークな転調を含んでいる。主題呈示部の終わりにはオクターヴで音を反復する ♭ y (8分休符) ♪♪♪ (ター・タタタ) というリズム・モチーフが登場する。展開部はこのモチーフで始まり、第1主題を軸に繰り広げられ、フーガ風のパッセージも挿入される。再現部のあとのコーダが、第1主題の一部を回想して終わるのはユーモラス。第2楽章アレグレット・スケルツァンドは朗らかなスケルツォ楽章。冒頭でヴァイオリンが奏でる第1主題を木管楽器の和音が支えるのだが、その音型が当時、発明されて間もなかったメトロノームの音を模したと言われる。第2主題の終わりには素早い同音連打のモチーフが使われているが、どこか、ヴィヴァルディの《四季》の「夏」の第3楽章冒頭を想起させる。第3楽章テンポ・ディ・メヌエットは優美な雰囲気を持ち、のびやかなメロディが舞曲らしいリズムでまとめられているが、突然のトランペットのファンファーレなど、諧謔的な要素も盛り込まれている。トリオではホルン2本がやわらかく主題を歌わせる。第4楽章アレグロ・ヴィヴァーチェは全曲の中で最も長い楽章。ソナタ形式とロンド形式を掛け合わせたような形態で、主題呈示部のあと、展開部が2つあり、再現部も2つ、そしてコーダで締めくくられる。多彩なリズム・モチーフが音楽を活性化し、細かく仕掛けられた転調も初期ロマン派への移行を示している。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。